

末黒野

すぐろの



12月号 (通巻772号)

虫の宿

小川玉泉

かなかなや波昏れのこる稚児ヶ淵

川施餓鬼小さき花火揚りけり

虫の音に消さるる宿の波の音

裏庭は膝越ゆる草虫の宿

こほろぎの高音日付の変りけり
虫の音に囲まれゐたり坊泊り
閑けさやけふも厨に鉦叩
小閑や露を宿せる草を引く
軒先の提灯古りぬ秋祭
近隣の二階屋ばかり藪枯らし
菩提子の小粒ばかりや一遍忌
影を地に帽子の縁の赤とんぼ

花野

松本三千夫

鼻唄の厨妻ゐて厄日かな
白陀師忌正翠師忌の九月来ぬ
一人来て流離ごころの花野かな
野にあれば我も野のもの吾亦紅
自転車の少女一瞥鯉飛んで
植木鉢重ね伏せられ昼ちちろ
通り抜けできぬ小路や葛の花
腰下ろすにはちさき石草の花
灯台を指呼に珊瑚樹いろ磨き
寺抜けて駅へ近道をとこへし
さんま二尾買ふ夕空に星ひとつ
鳥渡る磯馴の松に径尽きて

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

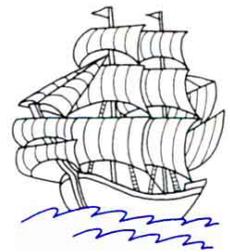
震災忌

黒滝志麻子

夜蟬なく梢にかかる星ひとつ
江戸川の流れの止まる大暑かな
ソムリエの皓齒爽やか白ワイン
木の間より真紅の日の出震災忌
大空の風に乗らむと燕去ぬ
数珠玉に日のぬくもりや夕磧
奥宮の老樹百態赤とんぼ
いよよ濃き朝霧まとひ山上湖
自づから湖に向く足吾亦紅
底紅や旧家に残る四脚門

稲刈

田中臥石



夏休み果てたる海に揚繰船
揚繰網掛けて繕ふ浜残暑
鴟啼くや煮鍋に青き瓦斯炎
妻挽ぎて来し秋茄子や朝の卓
稲刈の稲の香の満つ昼餉かな
鯖雲の広がる沖や喪服脱ぐ
きのふよりけふ海荒るる秋彼岸
新米を月へ供へて食うべけり
松の空鶴啼く朝となりにけり
雨戸繰る秋分の日の海の音

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

風の盆

西川みほ

蟹歩む地層の語る太古かな
諳ずる夫の戒名盆 供養
なほざりの柵田彩る赤のまま
殊の他夕雲赤き残暑かな
蟻螂を怒からせてゐる婆の杖
明け初むる山々清し風の盆
夜を徹する男鱧背や風の盆

露

松田泰子

突堤に恋のらくがき夏終る
草の花夜明の石の濡れてをり
宿の灯に露を踏み来し靴いくつ
空よりも海しづかなり秋桜
秋扇や顔の片側日の射して
山霧の濃し助手席に金縛り
思ひ出す事も供養や鳥渡る



静 寂 森清信子

秋 思 安斎久英

滴りの岩根を穿つ静寂かな
雪溪を出づる流れのきらめけり
蜘蛛の囲の全し俳句生みつがむ
心字池を我が物顔に鬼やんま
売るほどに葡萄の実りぶだう寺
稲光島の岩屋を出づるとき
初島を手にとるばかり雁の棹

夜の秋 吉田きみえ

久闊の友と越し方夜の秋
近道を抜け産土の鈴涼し
風止みて溪の底より蟬の声
今朝秋の雨戸を繰るや雀どち
医通ひの舗装路灼くる秋の昼
雑木山吹かれて明けの十月月
兎の見えぬ公園風の秋の蝶

木道の尽くる花野の没日かな
秋意濃し哀史を秘めし桂川
頼家の墓所へ川面を秋の風
人込みに置き忘れたる秋思かな
千枚田の刈入れ間近藤村忌
崎鼻へ寄せて秋思の波がしら
秋蟬の捨て身のさまに草叢へ

秋 大橋伊佐子

坐つても立ちても汗の一日かな
炎天を来て荷崩れのごとく座す
秋立つや口に含める薄荷糖
ケールを降り山頂の秋に会ふ
新涼や砂が吸ひこむ波の音
篠竹の生ふる中洲や虫時雨
葡萄食ぶ仏の夫と語らひつ

青炎集

小川玉泉選



横浜 石黒興平

横浜 鍋島武彦

日盛へ踏み出さんと一呼吸
川床涼み若き仲居の裾捌き
時折のしぶきを肴貴船川床
夕風や三日伏せたる暑氣中り
錆鮎の川知り尽す釣師かな
鹿の眸の貴石めきたる潤みかな

秋立つや風柔らかき果樹の里
直売りはせぬと主や長十郎
雨ぼつり頬を打ちたる白露かな
札所なほ山路一里やつくつくし
岬鼻の魚見櫓や鱒雲
夕づくや椋鳥群れ騒ぐ町の空

横浜 城戸緑

横浜 岡野里子

月皓とテトラポットの波の音
新涼や浮き棧橋の夕汽笛
雲と峰写す池塘や赤のまま
年重ね恋ふ故郷の盆の月
啼きつぎて蝸夕を昂ぶらす
藍染やたくみの里の水の秋

絵団扇の美女しなやかや風を生む
門川の水の豊かや紅蜀葵
三ツ峠指呼に夏野の芭蕉句碑
初秋の風たつぷりと夜半の雨
新涼や予後の大事と夫に告ぐ
静かさや眠れぬ夜半の鉦叩

黄昏の森ひぐらしの根限り

杣山の裾の風受け杜鵑草

激動の昭和生き抜き敬老日

灯台の色なき風や城ヶ島

デイケアの妻の戻りぬ夕ちろ

まだ売れぬ分譲宅地嬢蛛跳ぶ

横浜 小林一榮

横浜 森清 堯

安曇野にそそる山々稲の花

阿夫利嶺の雲千切れ初む秋隣

秋立つや竹林洩るる水の音

帰りに触るる風船葛かな

爽涼の崖や眼下の心字池

中島へ梯子を渡し松手入

横浜 内藤庫江

千葉 内山夕工

揚がるたひ浮き出づる城大花火

青年の和服のふゆる花火の夜

新涼の入日はるかや伊良湖岬

鯛ほか名を教はりて地引網

百円の札につられて秋刀魚買ふ

真向ひのはるかなる富士鯛雲

横須賀 大川暉美

新宿 稲垣佳子

涼風や雪洞点す朱の袴

文机の歳時記捲る処暑の風

新涼や広き御堂の青暈

静かさの二人に戻る虫時雨

朝顔や風と遊べる蔓の先

上総へと目差す舳先や星月夜

盆月夜亀の生みたる卵見に

竿足して柚子の黄色を挽ぎにけり

ひがん花かつて土葬の尼の墓

賑やかに一族集う秋彼岸

ふる里の新米抱へ届けらる

月祀る野の花壺に一抱え

ひぐらしや一人降りたる無人駅

いささかも日差しゆるまず真葛原

秋蝶のもつれ草葉にかくれけり

葛の葉を風のめぐりぬ日の匂ひ

送り火の尽く残り香の闇深く

鯛雲八百屋に古き吊り秤

巨林抄

| | | | | | | | | | | | |
|-------------|-------------------|--------------|-------------|----------------|---------------|--------------|--------------|----------------|--------------|--------------|--------------|
| 高原の闇の深さを星流る | ジーパンの似合ふ案山子のをりにけり | 句友みな乙女の声や暑氣払 | 正翠師逝きて一年秋の雨 | 閉づるとも日傘に残る熱りかな | 鯰とんで水の静かに動きをり | 溝萩や束ねて丈の定まりぬ | 長き夜や枕にひびく波の音 | ふる里の水面盛り上げ鮭のぼる | 鑄池の夕風均らす鬼やんま | 楽章の移るに間あり虫時雨 | 産土に遠く住みをり月仰ぐ |
| 今野明子 | 内田 梢 | 上野幸枝 | 山田本女 | 藤田千枝子 | 百瀬真山 | 上月智子 | 皆川千佐恵 | 庵原敏典 | 中島ひろし | 竹村清繁 | 神谷さうび |